

# お茶うけ 第32話

## ポリアンナ - 身近な人々に

去る9月5日、インドでマザーテレサが亡くなりました。一人の婦人が始めた、苦しむ人びとに寄り添い痛みを分かち合う心で仕えることを信条とする「神の愛の宣教師会」の心と行動が、世界中の人びとの心を動かし、多くの貧しい病に苦しむ人たちに安らぎを与えてきたことに、深い感銘を覚えます。

マザーテレサは、3度日本を訪れています。日本のある若い人が、「私はインドにボランティアに行きたい」と言った時、テレサが「あなたの身近なところで困っている人はいませんか」とさとした、という新聞記事がありました。

テレサのこの言葉から、私は子供の頃に読んだ、『ポリアンナ』の物語を思い出しました。いま本屋に並んでいるのは、『少女ポリアンナ』エレノア・ポーター著・菊島伊久子訳ですが、私の読んだのは『パリアナ』弘中つち子訳でした。この物語は、ディズニーにより1960年に『ポリアンナ』として映画化され、日本でも公開されました。

主人公のポリアンナは、アメリカ西部の小さな町のキリスト教会の牧師の一人娘ですが、父親も亡くなったため孤児となり、東北部のバーモント州B町にいる叔母に、教会の婦会の人達が半ば押しつけた形で引き取られることになります。義務感から引き受けることにした、ポリアンナの母親の妹に当たるこの叔母は、姉の結婚に反対していたこともあって、この姪を厄介者と考えています。

叔母の家に着いたポリアンナは、暑くて狭い屋根裏の殺風景な小部屋をあてがわれて、最初は泣きじゃくりましたが、間もなく「“うれくなる”ゲーム」で、元気を取り戻します。鏡がないのは、そばかすだらけの顔を見なくてすむから“うれしい”、高い屋根裏部屋は、窓から素敵な景色が見れるから“うれしい”という具合にです。「“うれくなる”ゲーム」は、亡くなった父親と一緒に始めたものでした。

それからポリアンナは、町で出会う人達と持ち前の明るさで気楽に話し合いながら、その人達の悩み事を、この“うれくなる”ゲームで解消し、その人達の中に喜びの心を広げていきます。しかし、父親に関する話を禁じている叔母には説明することもできません。

ある日お使いの途中で、ポリアンナはジミー・ビーンという孤児の男の子に会います。次の日ポリアンナはB町の教会の婦人会の集会に顔を出して、誰かの家庭で彼を引き取ってくれるように頼みます。しかし、婦人会はインドへの寄付には熱心ですが、ジミー・ビーンを助けようとはしません。がっかりしての帰り道に、ポリアンナは「婦人会の人達は、遠いところにいる子どもたちのことばかり考えていて、身近にいる困っている子どもたちのことを考えようとしない」と、ため息まじりにつぶやきます。

B町の学校に通うようになったある日、ポリアンナは自動車にはねられて、歩くことが出来なくなる程の重傷を負います。それを伝え聞いた町の人達が、次から次へと見舞いに駆けつけます。面会謝絶のため代わって対応する叔母に、心からの見舞いの言葉と、ポリアンナに教えられた「“うれくなる”ゲーム」のお蔭で、毎日こんなに楽しい心で生活していると伝えて欲しいと、日常の暮らし振りを話します。ジミー・ビーンも町の独り暮らしの紳士の養子になって働いていることを伝えます。叔母は、ポリアンナの暖かい心が町の人達に与えた力に驚き、自らも「“うれくなる”ゲーム」を始めます。

マザーテレサとともに働く連帯のなかに、4つの組織があります。その1つ、マザーテレサ協労者国際協会の活動は、イギリスから夫の赴任先のカルカッタにきたアンナ・ブレイキー夫人によって始められました。1954年にテレサに会った夫人は、直ちにテレサの活動を支援する作業グループをつくり、貧しい子供たちのためにシャツやズボンを縫い、治療に使う包帯を巻きや薬の袋貼りをし、ハンセン病患者のための募金のため街角に立ちました。アンナ・ブレイキー夫人がイギリスに帰国してから、この協労者会のイギリス支部が生まれ、インドのために募金を募り、衣類を送っていました。

後に、ロンドンを訪れたマザーテレサは、ロンドンのなかの貧しさを見て、夫人たちに身近な人びとを助けることを勧めました。いま、協労者会イギリス支部は、身近にいる孤独な老人、精神障害者、その他の病める人びとのためにも働いています。

以上

### 参考文献:

『少女ポリアンナ』エレノア・ポーター著・菊島伊久子訳 偕成社刊 1986年5月1刷

『マザーテレサ』和田町子著 清水書院刊 1994年9月1刷

